

はじめに

昨年四月にアップルから時計型端末 Apple Watch が発売され、Google のメガネ型端末 Google Glass も試験段階を終え、製品化へとその歩を着実に進めつつある。⁽¹⁾ また八月にはソフトバンクから家庭用ロボット端末 Pepper の一般販売も開始され、いよいよ人間がロボットと共生する社会が幕を開けようとしている。二〇一五年は、ウエアラブル元年といわれ、ロボットや人工知能が人間の能力を超えるという「シンギュラリティ」(特異点)の問題もまことしやかに語られ始めた。そして二〇一六年は日本で「マイナンバー」制度が波乱含みで本格始動する年である。「情報社会」論の草分けである増田米二が一九六〇年代末に初めてその青写真を提示した。電子政府が、インターネットを介して、国民をネットワークに組み込むことで愈々総仕上げの段階に突入した。「私たち全部にソーシャルナンバーが付き、総理大臣の選挙がテレビ電話による国民投票によって行われる。こういった時代がやってくる」という増田の予言、というよりむしろ悲願の達成まであと僅かの道程である。情報社会は今や新たなステージを迎えつつあるといってよい。

だが、そもそも「情報社会」とは何なのか？

曰く

◎「情報」財が「物」財と並んで、重要な価値として認められ、それが商品として流通する社会。

◎物理的な暴力によってではなく、「情報」操作によって人々をコントロールする管理社会の新しい形態。

◎日々、洪水のように押し寄せてくる「情報」から、正しい情報を選別する批判的メディアリテラシーが必須となる社会。

等々…。

これらの答えは槌かに「情報社会」の或る相、「現れ」を指摘し得てはいる。だが決して「情報社会」の総体そして本質を捉えてはいない。それらは飽くまで「情報社会」の「露頭」であり「効果」に過ぎない。複数の「露頭」はその根底にある「地層」という構造物（更には「マントル」という運動体）の一部に過ぎず、「効果」もまたその「本体」の存在と機能を前提している。では、もう一度問おう。「情報社会」の「地層」「マントル」部分あるいは「本体」、すなわちその本質は何か？

結論を先に言えば、それは諸「メディア」が構成する閉じたシステムである。「情報社会」の底流で蠢いているもの、それは、「インターネット」というメディア技術を軸に自己組織化する（ネットワーク）というメディア・システムである。一九八〇年代に登場し、一九九五年に社会インフラとなったインターネットは、今や、既存の旧メディア、すなわち、テレビ、新聞、映画などのマスメディアはもろろんのこと、書籍（活字メディア）や手書き文字、更には声メディア（すなわち対面的コミュニケーション）までも、その傘下に組み込むことで、それら既存メディアの社会的機能を組み替えながら、（ネットワーク）メディアを主導的なメディアとするこれまでにないメディアの「生態系」、

メディアの、オートポイエーシス・システムを完成させつつある。そして、このシステムは近い将来、(ウェアラブル、ロボット、AIを介して) われわれの視・聴・嗅・味・触という感覚(身体メディア)までもも寡奪し、(メディア)生態系に組み込んでゆくであろうこともほぼ確実である。

既存の「情報社会」論が、「実証性」を口実に、極めて皮相な時流批評や断片的な現象解析に終始してきたのは、「情報社会」を——先に数例挙げた如く——メディア技術によって引き起こされた可視的な事象の総体としてしか把握してこなかったからである。これを「他山の石」としつつ本書では、様々な時事的現象の根底に、在って運動している不可視の「情報社会」本体を分析と考究の対象としている。すなわち本書は、マクルーハンによって唱道された、「これまでの人類史とは、主導的メディアが形作ってきたメディア生態系、メディア・パラダイム——マクルーハンはこれを「銀河系」(galaxy)と称する——の変遷の歴史であった」とする(メディア)史観の光の下で、またルーマンによって構築された、社会を従来のように(人間)の「代数和」や(人間)的行為応酬の「合力」と見るのではなく、「非人称的コミュニケーションの連鎖的持続」として把握する社会システム論を援用しつつ、Google、bigdata、SNS、ロボット、AI、ウェアラブル、情報倫理、といった具体的な現現象を分析の俎上に載せ、それら現象の底で稼働している、不可視の(メディア)生態系(そしてそれこそが「情報社会」の本体である)を白日の下に晒す試みである。

本書は、形式的・表面的には、その間に「情報社会」が驚くべき進化を遂げた二〇一〇年から一六年にかけての、情報社会関連の時事的なトピックや話題を扱っている。にもかかわらず、その本意は個々の現象の分析そのことではなく——繰り返すが——「情報社会」そのものの存立構造とメカニ

ズムを暴き出すことによって、それを「脱構築」することにある。その意味において、本書が標榜するのは表層的現象の解析とその集積に過ぎない。情報社会の「論」あるいはその「批評」ではなく、本書のタイトルが示すとおり飽くまでも「情報社会」の〈哲学〉すなわち「情報社会」の、マルクスが謂う意味での〈体系的批判〉(クリティック)である。

以下に本書全体の見取り図として、各章の概要を記す。

「序章」では、誤解に基づいてこれまで不当に過小評価されてきたM・マクルーハンに新たな光を投じて、その思想の〈検証・顕彰〉作業を行う。マルクスの唯物史観にも比すべき「メディア史観」の唱道者としてマクルーハンを位置づけ、既存の「情報社会」把握に、彼のシステム論的把握を対置することで、以降の議論における前提的・了解の読者との共有を図る。

本論の前半部分では、「Google」「ビッグデータ」「SNS」という三つの「露頭」を「情報社会」本体に斬込むための突破口として設定し、情報社会トータル輪郭を「知識」「情報」「データ」そして「コミュニケーション」という主題系に即しながら描き出すことを試みる。

インターネットを主導的メディアとする情報社会のパラダイムを、常に牽引してきた立役者の一つがGoogleと、この企業であることに異論をはやむ者はない。Googleは世に存在するあらゆるデータの収集・蓄積と、それを元にした自己運動する巨大なデータベースの構築という手法によって、それまでの「知識」観のコペルニクスの転回を成し遂げた。「第一章」ではGoogleをギリシャ時代の神話からコメニウスの汎知学を経て百科全書へと続く「知識」論の系譜の中に位置づけることで、Googleの企図が持つ文明史の意味を炙り出す。と同時に、「情報社会」における〈知〉のあり方の変

貌とその機制^{メカニズム}を論定する。

「統計学は最高の学問である」という一頃流行ったセールズトークに反し、インターネットを主導的メディアとする情報社会は、統計学をむしろ時代遅れのディシプリンにしつつある。なぜなら統計学は、データの全数解析が原理的に不可能な時代の、サンプルデータによるモデル（仮説）構築とその検証（検定）が基本だからである。だが、現在のビッグデータにおいては全てのデータが手に入るがゆえにモデルは何の用をもなさない。それどころか、ビッグデータは動的特性を本質とするがゆえに、そもそもそれとして対象化することすら難しい。「第二章」では、統計思想の歴史を辿り、それに接続させつつ、ビッグデータの本質を、マルクスが分析した「資本」^{ダス・カピタル}（das Kapital）の運動にも比すべき、「情報」と「データ」との交替的増殖の過程^{プロセス}の〈主体（Subject）= 実体（Substanz）〉化、そしてその結果としての「意思決定の自動化」に見定める。

ルーマンの社会システム論は、その過度の抽象性からくる難解さによって大方の読者に敬遠されがちである。現実の社会把握や社会分析には役に立たない空虚な概念構築物に過ぎないと揶揄される。だが、実はルーマンの社会システム論の抽象性は、情報社会そのものが持つ抽象性を把握するために不可欠かつ不可欠である。「第三章」では、Twitter^{ツイッター}やFacebook^{フェイスブック}に代表されるいわゆるSNSによって、情報社会におけるコミュニケーションが極度に抽象化されており、その理論的把握を可能にするのが社会システム論にほかならないことを明らかにする。また、ルーマンの「社会システム論」とマクルーハンの「メディア史観」の親和性と相互補完的な関係性を本章で確認し、後半の分析に際しての方法論的な足場を固める。

本書の後半部分では、「人工知能」「ロボット」「情報倫理」というやはり三つの「露頭」から垣間見える「情報社会」における「人間」の行く末を「占う」「占う」といっても、七〇年代に猖獗を極めた「未来学」(Futurology)の如く情報社会が実現するはずの、薔薇色の未来生活を夢想するわけではないし、また現在跳梁する「IT批評家」の如く、根拠無く危機を煽ったり、最新情報技術が如何に生活を至便かつ豊かにするかについての空虚なセールストークを弄するつもりもない。「IT批評」は断片的な個々の最新テクノロジーとその短期的効果・効用や影響ばかりに目を奪われ技術が本来的に有する体系性を一顧だにしない。「未来学」の場合にはテクノロジー群の「シナジー効果」とやらによって期待される近未来社会の中長期的ヴィジョンを描き出す、という意味において、ある種の「体系性」は看取できるものの、その脳天気な目的論によって、テクノロジーが実現する理想社会「テクノトピア」が結論として先取されてしまっている。そこには技術に対する批判的眼差しが入り込む余地はない。これらに対して、以下でわれわれが事としたいのは「情報社会」の——繰り返しすが——〈体系的批判〉(Kritik)である。

おそらく「情報社会」の今後はわれわれにとつて決して明るいものではないが、表面的な現象に一喜一憂するのではなく、まずは「露頭」を「観察」し諸事象を〈体系〉化することがわれわれにとつての最優先課題となる。その作業を経て初めて「情報社会」の本質を、そして「人間」の行く末を、見極めることもできよう。

今後、ルーティン化された作業をのみ行う産業用ロボットやトイロボットを超えた、〈自立〓自律〉型の社会化されたロボットが続々と市場に投入されるはずである。ソフトバンクのPaperやロ

ポット掃除機 ルンバ Roomba はその魁さきがけに過ぎない。Google もまたロボットベンチャー企業を次々と買収し、自動運転車の完成まであと僅かの地点にまで漕ぎ着けている。ロボットと人間との社会的 共生 が SF 上の話ではなく現実味を帯び始めつつある。こうした動きの中で、「二〇四五年にはロボットの能力が人間を超える」とするシンギュラリティ（技術的特異点）問題が取り沙汰され始めた。このシンギュラリティの問題も含めて、現在の「ロボット」そして「人工知能エー・アイ」理解は「ロボット（AI）vs. 人間」という対立構図を前提している。だが、インターネット・パラダイムの中で、こうしたロボット（AI）理解はすでに現実によって超克されてしまっている。「第四章」では、人工知能とロボット技術の進化、そしてその設計思想発展の経緯を跡づけてゆく中で、〈ネットワーク〉が AI を介して人間やロボットを ノード として自らに組み込みながら、そして具体的に人称的な「身体ライヴ」(Leib) を「身体性ライヴヒカイト」(Leiblichkeit) として抽象化・非人称化・資源化しながら〈自立自律〉化する、AI とロボット（そして「人間」）の新たな地平を対自化する。

倫理学の一分野ないし応用倫理学の一つとされる「情報倫理」が扱う主な内容は、メディアリテラシー、ネット（ネットにおける儀礼・作法）、著作権遵守、サイバー世界の差別と格差（デジタル・デバイド）の指摘、である。いずれの主題も、インターネットによって惹き起こされたアノミー、アパシー、アナキーを如何に既存の社会秩序の枠組みに押し込め、回収してゆくかが目指されているといつてよい。だが、われわれはむしろ、情報社会においてそもそも〈倫理〉は可能か、という原理的な問いをこそ発さなければならぬのではないか？ なぜなら、従来の「一元的価値の共有による社会統合」という倫理の大原則が、情報社会における価値相対化の中で根底から崩し崩しにされつつ

あるからである。グローバリゼーションと並行して昂進するナショナリズムと宗教的原理主義の跋扈がそのことを端無くも示しているよう。「終章」では、様々な倫理・道徳学説の「情報社会」における可能性を吟味・検討しながら、「メディア」論的および「システム」論的なアングルから、「情報社会」にとって〈倫理〉とは何であり得るのか、という原理的問題を考えたい。

注

- (1) 二〇一五年一月に、日本での発売も取り沙汰されていた Google Glass の発売を全世界的に中止する旨のアナウンスがグーグルから出された。プライバシー侵害の危惧が背景にあると思われるが、この発表を Google Glass のあるいはスマートグラスの「失敗」とみるのは短見の極みである。グーグルはそれほど柔^{ユウ}な企業ではない。早くも同年一二月に次世代モデルの特許が米国特許商標局 (USPTO) から公表されている (patent No. US 9195067B, “Wearable device with input and output structures”) し、驚くべきことに同年一月には、コンタクト型デバイス (通称「Google Eyes」) の特許も公表されている (patent No. US 20150002270 A1, “Methods and Systems for Identification of an Eye-Mountable Device”)。グーグルとはそれほど強^{ツヨク}かな企業なのである。
- (2) 増田米二については拙著『情報社会』とは何か?——〈メディア〉論への前哨』(NTT出版、二〇一〇)「序章」を参照。
- (3) 増田米二『情報社会入門』(ペリかん社、一九六八年)「はしがき」。